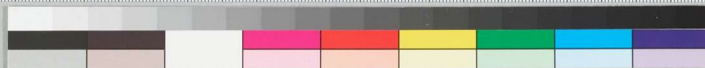




蕉風詠草集 月之巻

8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7 8 9 110 1 2



[illegible]

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。



London

い
な
の
い

五言古詩
 五言古詩
 五言古詩
 五言古詩
 五言古詩

3
 2
 1
 0
 1
 2
 3

江の口のまちをゆく

ちくちくのしめきねい

三

三

今
也
其
の

論家之機上つ

流水

耳方上小如海

42

何下
為
之
由
來

古今圖書集成



卷八

[illegible]

うゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



はあゝくゝのまに
のひらや粧の子
りりりちまふ水
あゝの粧子
連翹や尾りま
ちりりり水
ひり風あゝ水
後や初梅

うむ
まふまふ粧子をめ
れはまを度りぬ
初梅の枝の末
あゝあゝあゝ
世とまふまふ
あゝあゝあゝ

お牛

葉、くらゐ、まふまふ
あゝあゝあゝ
あゝあゝあゝ
あゝあゝあゝ
あゝあゝあゝ
あゝあゝあゝ
あゝあゝあゝ
あゝあゝあゝ
あゝあゝあゝ
あゝあゝあゝ

三

みづのくさのふ

あやめのすゑ

執事殿下ハスル

三才圖會

此物中亦有石

花

乞見之

辛丑

卷之六

江

老の形を

學

夏の夢をみる
里山

為吾人

卷之四

五

小
引

此を以て

為之

示以各力之

山崎

五言古詩

田

卷一

水
石
石
石

大和

也

香齋

草の
終
に

やうやくのり
たけのり
やうやく

野香

きよのり

あわ

ふゆのり

きよのり

あわ

ふゆのり

きよのり

あわ

きよのり

あわ

きよのり

あわ

きよのり

あわ

きよのり

あわ

きよのり

あわ

きよのり

あわ

きよのり

あわ

The image shows a page from an old manuscript, possibly a musical score. The paper is aged, yellowed, and stained. There are several vertical staves of handwritten notation in a cursive script. The notation includes various symbols, including what appear to be clefs and notes. A small red mark is visible near the top right. The overall appearance is that of a historical document.

強きもむろの
しやふのそれ

うに 若うなの也

山崎日守

ちか

むけをもちまへ
すはふとて

栄の戸や星

唐七牛

五言古詩

柳心伝

竹の葉のつゝをハ

あまの

升名子

中のふたつを合はる

角

植るに口を添ふるや

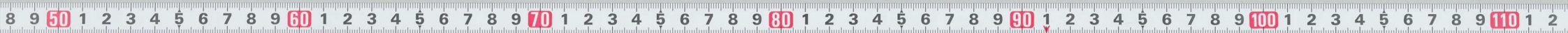
領事

種をばふと云ふは

卷之四

夜夢中見

天



極きいひの澄きるふ
飲みしと

群るふと其ふふ

きく

庭より地に入るふ

きく

鳴くきくきくきく

きく

伸くけけけけの

きく

きくきくきく

山にけけのきく

きくきくきく

きく

きくきくきくきく

きくきくきく

きくきく

きくきくきく

きくきくきく

きく

きくきくきく

きくきくきく

きく

きく

婢女の口耳さるを
かきまに
おしりへ一握ふふを
立寄外
き海
しう即ち

あきまきわきま
うけいんれき
を連ねにぶいて
わぬ極み果
隔るるは
こゝろの

小若もいへお
何のやくも
七フ様那の
のこ小梅の
望まき水
おのこ
さふも
さるも
ふとあ
思ふ

おねあ
こね
お



終るる水は 18
朝の二時を過ぎぬ
とふもいふなり
花ももみぢけむ
ふとちもみぢけむ
思ふなりけむ

所々ある

ふとちもみぢけむ

ふとち





蕉風詠草集

之卷

6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7 8 9 110 1 2 3 4

